



婦人と子ども

第六卷第六號

子どもの畫

世の中に子供の顔ほど無邪氣なものはない、子供の姿ほど可愛いものはない。何れ程冷酷な人でも、如何程腹の立つた時でも、この顔この姿に對しては、どうして心の動かされないものがあらうか、深夜人の門を破つて闖入した強盗でも眼醒めて床より這ひ出た赤兒を見ては、我を忘れてあやしにかゝつたといふではないか。

この無邪氣な可愛い子供の所作も同じ様に無邪氣で愛らしい、従つて西洋の畫家や詩人が、子供に就いて畫いたり歌つたりして居るのも、誠に多い。然るに獨り可笑しいことは、日本に於て、子供を畫題にして描いた畫家がまことに少く、詩や歌の題にして歌つた歌人がまことに少いのである。

従つて西洋には子供の畫の傑作も随分多いのだが、日本にはこれに乏しい。我國の畫家の畫いた子供の繪など愛らしくなく無邪氣でないものはない。例令ば顔は丸で大人の様に、姿は丁度人形の様だ。とても生々とした子供の精神が顯はれて居ない。或は日本の畫の風が子供を顯はすに適しないものか、或は日本の子供の顔の筋肉の具合が畫くに不適當だとか、或は子供の着物が不恰好だから不可ないとか、様々の理屈を云ふ畫家もあらうけれども、理屈としては何れも取るに足らぬ、つまり、古から吾々日本人が子供といふものに付いて趣味を感じるものが少かつたから、従つて子供に就いての畫も他のものに、様に發達しなかつたのだらうと思ふ。